

新約聖書ギリシャ語を現代語式発音で教える事について

杉山 世民

どのような言語であれ、それが生きた言語として人間生活の中で用いられている限り、その言語の発音は生活においても、また、研究においても重要であることは言うを待たない。しかし、古代のギリシャ人が、どのような発音でギリシャ語を話していたかを正確に知る人は誰もいない。紀元前五世紀の古代アテネの黄金時代のギリシャ語の発音を復元しようと努力したエラスムスの評価は惜しむべきではないが、新約聖書のギリシャ語は、アレキサンダー大王の後、いわゆるコイネー期、あるいはヘレニズム期と呼ばれる時代に、地中海地方において広く用いられていたものであり、古典期のギリシャ語とは、発音においてもかなり異なっていたと考えるのは妥当である。

F. Blass と A. Debrunner は、新約聖書のギリシャ語が、地中海地方において話されていたイタリア語、スペイン語、フランス語、ギリシャ語、アラビア語、トルコ語などの要素の入り混じった「混成言語 (lingua franca)」に属すると言うが、新約聖書が書かれた紀元一世紀に地中海地方で共通に話されていた極普通 (κοινή) の言語が、新約聖書のギリシャ語であったことは、J. H. Moulton の『エジプトの掃溜から (From Egyptian Rubbish Heap)』というパピルスの発見の話からも裏付けられる。又、例えば、τραῦμα が、誤って τράβια と表記されているパピルスの存在は、au という二重母音が発音に近づいていることをよく示していると言える。

今日、大体、どこの神学校でも新約聖書ギリシャ語が、教えられる場合にはオランダの学者エラスムスによって考案された「エラスムス式発音」で読まれ、教えられる場合が多い。しかも、この「エラスムス式発音」は米国人が発音すれば、英語なまりが入り込み、時にはドイツ語なまりさえ混入したりする場合もあって、聞いていて余り感心しない。それよりも現代語の発音で読む方が、はるかに真実味があって良いと私は、思っている。尤も、紀元

一世紀のギリシャ語をいきなり現代語式で発音するには多少の無理があると思われるかも知れないが、しかし、私の恩師、織田 昭先生が『ギリシャ語小辞典』に書いておられるように、今日のギリシャ人がホメーロスの作品を読むのに現代式の発音で読むことを思えば、我々が「古事記」や「万葉集」などの古典作品を現代式で発音するのと同じで、それほどおかしくもないのであろう。アテネ大学の神学部の教室で、私のお世話になった新約学のブルガリス教授がヘブル書を現代語式で朗読された後「ギリシャ語というのは美しい！」という感嘆の声をもらされたのを忘れることができない。

私は、新約聖書のギリシャ語からギリシャ語の世界に入って行ったが、現代ギリシャ語も、古典ギリシャ語も本質的には、同じ一つのギリシャ語という言語であって、時代の推移による様々な変化はあっても、関本先生が言っておられるようにギリシャ語を「全体」として捕らえる必要があると思う。「古代から現代まで三千年に亘る一貫した発展の歴史をもつ言語ギリシャ語は、それ全体が一つの大きい興味のある対象でなければならない。」（関本至著『現代ギリシャ語文法』）そのような意味でも、私は、現代ギリシャ語を発音も含めて大切に思い、重要視する者の一人である。

私は、大阪聖書学院の教室で新約聖書のギリシャ語を現代語式の発音でずっと教えてきた。たとえ「無謀」と非難されても、ギリシャ語を歴史的に生きた一つの言語として教えるのに、あるいは、学ぶのに、今も、現に歴史の中に生きているギリシャ人によって、生きた生活の中で実際に使われている発音を用いて教える方がギリシャ語という言語の持つ「生きた心」を学びやすいように思われてならない。本来、言語というものは、決して自己目的的なものではなく、あくまでも人間同士の心を伝える道具、手段であって、このギリシャ語という道具、手段を使って何を学ぼうとするのかという事の方が、より大切なことであると考えている。ギリシャ語という言語の持つ美しさや表現能力の豊かさにのみ目を向けるだけでなく、この言語が、その歴史においてどのように用いられて来たかということにも目を向ける必要がある。

新約聖書のギリシャ語が、ただ、いわゆる学者や知識層の人達だけではなく、当時の地中海世界の一般の人々に広く用いられていたコイネー（キニー）ギリシャ語であったことは興味深い側面を持っている。発音も、又、ギリシャ語という言語の持つ美しさの一つである。長い歴史的経過を経て現在に至っている現代語式の発音を大切にしたいと思っている。